

瓦大工橘氏の瓦銘

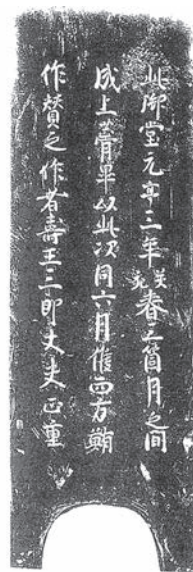
理事 中尾 正治

ここでいうところの橘氏は、建造物の屋根を覆う瓦の製作と葺き上げの技術を担った瓦工集団を形成し法隆寺、薬師寺、唐招提寺、靈山寺等の大和諸寺を始めとして、多くの瓦篋書銘を残し、そして後になって大和地方だけでなく播磨地方及び京にも足伸し寺院の屋根瓦に天平年間以降数代に亘って書銘を記している瓦工のことである。その瓦の書銘は鬼瓦や足元、鳥衾、獅子口に製作者自身の姓名から製作年月日、居住地、他に自分の幼名、年齢などを記し、軒丸、軒平瓦等にも屋根に葺かれるあらゆる種類の瓦に書き残している。

大和地方の橘氏

橘正重

瓦大工橘氏の中世における現存する史料の古例は、唐招提寺金堂の鴟尾に篋書で「此御堂元亨三年癸亥春三箇月之間成上葺畢以此次同六月候西方鮪作贊之作者寿王三郎大夫正重」と記されている。奈良時代の本格的な遺構として存在しているこの金堂の荘重たる屋根の主役になる東西鴟尾の内、現状の東側棟端に納められている復古の後補鴟尾を寿王三郎大夫正重が元亨三年(1322)に製作していたことになる。正重は、古今一陽集その他法隆寺関係史料から元弘二年(1332)法隆寺塔頭福圓院(旧蓮華院)地藏堂供養の「施主瓦大工三郎大夫」と見え同一人と思える。



橘国重

永徳三年(1383)になると法隆寺夢殿の修理棟札裏面に「瓦大工橘国重」以下九人の瓦工の名が記されている。国重は瓦大工を名乗り工人集団の階級的な臈次ではなく、瓦工の統率者であったと見られ、座のような形態を成した工事組織の技術上筆頭に相当する地位に就いていた。そして応永五年(1398)法隆寺西円堂修理棟札には「在家奉加衆」の一人として国重が見え、瓦葺衆として大工国重をはじめ権大工吉重ら五人の名が綴られ、この頃か

ら瓦造りと伴に瓦葺きを瓦工の生業としていたことが分かる。

国重の瓦銘は応永五年から六年後の応永十一年(1404)法隆寺五重塔三重東南隅鬼瓦に「ヲウエイ十一年キノエサルノトシ四月八日、タチハナノ国重(花押)、五十二ノトシ寿王(花押)」と記し、同塔三重東北隅・西北隅、四重東北隅鬼瓦にも同じような内容の篋書きをしている。国重はこの時期高齢であったので瓦工の指揮を任せられる後継者の指名も行っていたようであり、血縁者かどうか明らかでないが後継者の名前が記されている瓦銘が数多く見出されている。



橘吉重

応永十二年に法隆寺講堂北西隅棟鬼瓦に「コノトシワ大夫殿フクノハテナリ、大工ノトシワコノトキハ廿八ニナルナリ、瓦大工彦次郎」とあってこの文面から分かることは、国重は瓦大工を退いたとし、二十八才の彦次郎が瓦大工を名乗ったと読み取れる。ところで瓦大工彦次郎は、二十九才のとき法隆寺聖霊院鬼瓦に「吉重、瓦大工ヒコ次郎コノトシナヲカエテ寿王三郎トナヲツクナリ、ナノリハ吉重瓦大工ヒコ次郎トシ廿九」記していることから吉重が事実上瓦大工になり、寿王三郎を襲名したことが分かる。

吉重については、法隆寺をはじめ大和諸寺そしてまた京において瓦大工橘氏の作品の中でも最も多くの書銘を残した人物であり、その点橘氏の系譜において特に興味のそそる存在である。書銘は篋書が殆どでその内容から彼の年譜の一部を知ることが出来る。生年は永和四年(1379)であり、応永五年(1398)二十才に権大工であった。応永十二年(1405)は先代の国重が退任したかまたは身罷ったのか不明だが吉重は二十八才には瓦大工になっていた。実は前年の応永十一年には瓦大工に就任していた。永享十年(1438)の書銘から応永十一年の二十七才のときと知れ、そののち寿王三郎を襲名し、幼名が彦次郎であり、工事組織の長として職工達を統率していたことが窺える



書銘がある。また彼の籠書きは一癖ある表現に見て取れ、自己流であろう長文はカタカナ文であり、当て字で方言を混ぜて流暢に書き、さらに当時の民衆の話し言葉は発言通りに、戯れ歌に至るまで書き込み、これは吉重の筆跡だと一目で判読でき、瓦大工吉重の仕事ぶりや人柄を偲ばせるものがある。

先述したように、吉重は二十才のとき権大工、二十七才で瓦大工になり、幼名は彦次郎と称すとし、二十九才のとき寿王三郎（寿王大夫とも言った）に名を改めたと自己紹介している。五十九才から「ユウアマタフトユウ」と称するようになり、この頃は土打ち等仕事を伴にした仲間十名ほどを紹介した銘文が法隆寺南大門の軒平・軒丸瓦に刻まれている。

七十一才の長命を得た吉重も文安五年(1448)になると「子ンフツヲ申テクルヘシ」とか「ナムアマタフツ」など仏に寄り纏る弱音を吐き始めた。そしてこの時期を最後に彼の特徴とするカナ混じりの籠書きが見られなくなってくる。

二代橘吉重

文安五年から逆昇ること嘉吉元年(1442)、橿原市吉楽寺本堂の丸瓦銘に「瓦大工橘吉重寿王大和国飯高郷****」と漢字の楷書が使用された籠書がある。この書体は一見してカナ文のユウアミ吉重とは異筆別人と思われる。恐らくユウアミ吉重の後を継ぐ吉重であろうと年代から見て取れ、父子の関係だと推察される。ユウアミ吉重末年の文安五年の瓦銘「ユウアミユツルナリ」と記されていることから、次の吉重が瓦大工として出現した。

前の吉重は、その瓦銘中に仕事をした仲間の名が散見されている。法隆寺諸堂の銘文に寿王次郎、左衛門五郎などがあって次の瓦大工の名とも予見されるところで、前の吉重自身も左衛門次郎、彦次郎左エ門大夫の他に寿王太郎、寿王丸といった名を用いている。

ここで、前のユウアミ吉重を初代、次の吉重を二代として書き進めることとする。

初代吉重は「セイ大イノ彦次郎」と記し、二代吉重は「招提彦次郎」と名乗り、二代吉重の作品は、先代からの法隆寺に限らず大和諸寺や他の地方に対しさらに活躍の場を拡げている。橘氏一派の瓦工達は、播磨や京へ以前より況して進出していたが播磨での橘氏が「大和國西之京」と出所地の書銘を残していることから見て、瓦大工橘氏の本拠地は作例の多く残る法隆寺というより寧ろ西之京の唐招提寺であり、正重の唐招提寺金堂鴟尾銘を思い出させる。

三代橘吉重

次に、橘氏のその後の活躍は三代吉重の存在が確認できる。

大永四年(1514)法隆寺綱封蔵平瓦から、「大永四年甲申二月十二日ヨリハシムル舜清法

師也施主十宝院瓦大工ニシノキャウヨシシケ作也」と見える。二代吉重は瓦銘に年齢を記さないで正確な年譜を辿ることはできないが、嘉吉元年(1442)の二十七才には瓦大工職に就き、長享二年(1488)に寿王大夫と名乗り、この頃は七十才を越える高齢者になっていた。法隆寺綱封蔵瓦銘の大永四年頃までには瓦大工職の交代があったと考えられ、従ってこの頃に瓦大工を名乗っている人物は三代吉重であると見做すことができよう。因みに、初代吉重は二十代後半に瓦大工に就いている。

播磨・京の橘氏

瓦大工橘氏は、室町時代になって播磨や京へも出向き、大和だけに留まらず地方都市に拠点を持つ動きが活発になるがこのことは瓦工に限らず木工にも言えることであって、既に鎌倉時代後半から地方への進出が窺え、京の東福寺や尾道浄土寺、兵庫県下の諸寺に奈良工匠の名が文書や棟札に誌されていることから分かり、建築職工の地方への拡がりが見られる。

おわりに

瓦大工正重から三代吉重まで橘氏一派の造瓦と屋根葺きに関わる経過を瓦銘文で追うことによりその存在と活躍を読み取ることができたと思う。吉重以降の橘氏を名乗る後裔達は播磨に本拠を置くことになるが、移した後も誇らしげに大和西之京と明記し名乗りとした場合があったと推察される。しかし播磨での橘氏瓦銘は桃山時代以降になると見られなくなる。

本貫の地、大和において、慶長十一年、橘氏縁の瓦書銘が見られるが、それ以降見受けられなくなるが突如、元禄年間に「大工与次兵衛尉橘吉長」、「石見掾橘義永」、押型で瓦大工橘吉長とあり、更に江戸時代後期の寛政から享和に「石見掾忠恒」の名が出現してくる。これらの瓦工が由緒ある橘氏吉重の系譜なのかどうか確証はないが、少なくとも古代中世を通じての橘氏の書銘瓦が法隆寺等の大和諸寺の屋根にあるのを見て心を動かされ、誇り高さ瓦工の存在を知り、その影響から橘氏を名乗ったものかも知れない。

瓦師の研究は、造瓦および葺き方の技術、史的調査などが対象となる中で瓦師の存在が知れてくる。橘氏の場合、古代中世から近世に及ぶ系譜を辿ることが瓦銘など史料により可能になった。

16世紀末から17世紀初期になると城郭、大寺院の造修築が戦国からの復興と為政者の権威誇示などの理由から畿内を中心に行われるようになり、京では伏見築城、聚楽第造営、大仏殿建造などから深草と大仏瓦の繁栄する弾みとなった。また、寛永期以降には江戸・京を主に幕府の施策により各所寺院の造営、改修が相次いだ。そして50年後の元禄年間には

国内の経済が豊かで安定したこともあって各地の寺院の再建が行われたことにより瓦の需要が高まり、間もなく瓦葺の奨励期を向かえことになり、そのような中で瓦工達が代々継承されていく例が見られようになる。

大仏瓦師の流れを汲む福田加賀守一派は大徳寺、妙心寺などの瓦を近世初頭から江戸中頃まで数代に亘って統率者が脈々と継承されている。私的調査の範囲内であるが、南山城地域においても宇治の山田源左衛門、木津の三上源右衛門は明治時代まで続いていたことが分かっている。

ここで、紙面の都合により記述を終えるが、内容は充実したものでない。取り敢えず大和地方を主とした橘氏の足取りを記述した。橘氏の業績は播磨、京都方面にも数多くの瓦銘が見出され、関係する史料も蓄積されている。別の機会があるようなら、続記することには躊躇いはないつもりである。併せて橘氏の瓦銘から年譜を羅列的になるが表組にすることも思っている。

以上

参考文献

- 『考古学雑誌』第六巻第六号「瓦大工寿王彦次郎橘吉重」天沼俊一著 大正5年2月5日
- 『校刊美術史料』第八八号～九一号「古建築銘文集」(一)～(六)伊藤延男蒐集 昭和37年7月～12月
- 『日本建築史図録』室町 天沼俊一著
- 『大和地方の在銘瓦集』高橋美久二著 昭和50年
- 『史迹と美術』第三十二ノ十「播磨の瓦大工・橘氏」田村信成著 昭和37年12月1日
- 『若文』第七号拙稿「山城国在銘瓦銘文集」 昭和50年5月31日
- 『京都考古』第69号拙稿「八幡近郊と南山城地域で名を残した瓦師」1993年3月20日